# 第 77 回二紀展

## 美術講演会　　聴講無料

演題　「美術はどこに行くのか」

### ― リアリズム、人間像 ―

近代に西洋美術の移植でポイントになったのは、リアリズムと実在的な人間像の移植でした。ここで「写実」の語が 1890 年頃に生まれ、それまで神仏に多く使われた「写真」、動植物に使われた「写生」も、それぞれ photography や sketch の意味に変化します。「裸形」から「裸体」、「人形」から「人体」への変化も、figure（形、影）から body（体）への認識変化によるものでした。しかし 20 世紀を通じて人体や人間像は解体され、人（神、自然）、人間（社会）、人類（宇宙）の語も、何に対する自己規定かを反映しました。機械と人間が交錯した人型ロボットは、西洋（神人同形）と日本（汎神論）の人間観の違いを浮き彫りにしましたが、いま美術を語るキーワードも「時間」「空間」「存在」「物質」から、「記憶」「認識」「知覚」「コミュニケーション」へと移行しつつあります。美術が、周囲の環境変化による人間の自己定位と更新を反映してきたとするなら、いまそれはどのような地点にあるのか、近現代の軌跡を見てみたいと思います。

講師　：　佐藤　道信（さとう　どうしん）氏

東京芸術大学名誉教授

プロフィール

1956（昭和 31）年秋田県生まれ。

東北大学文学研究科修士課程を修了（1981 年）後、板橋区立美術館（1981 年～）、東京国立文化財研究所（現・東京文化財研究所、美術部研究員、1982 年～）を経て、1994 年より東京芸術大学に勤務（美術学部芸術学科）。今春（2024 年 3 月）定年退任。

専門：近代日本美術史。日本画、美術用語、日本・欧米間の日本美術観の違いなどを研究。

主要著書：『〈日本美術〉誕生』（講談社 1996、筑摩書房 2021）、『明治国家と近代美術』（吉川弘文館 1999。サントリー学芸賞、倫雅美術奨励賞）、『美術のアイデンティティー』（同　2007）など。

10 月 19 日（土）14：00～16：00

国立新美術館／３階講堂（13：30 開場）

※**入場整理券**を 10/19（土）**13：00** より会場前にて配布いたします